

龍谷顕真会会報

も く じ

記念講演

「国際化時代における宗教について」 龍谷大教授 口羽 益生 2～11
 — 宗勢実態基本調査を願みて —

「宗門の願い — 真宗者にとって靖国とは」 総 務 朝枝 実彬 12～15

体験発表 「寺院と地方行政」 大分・久住町前町議 志賀 諦了 16

「私の議員生活」 島根・金城町々議 竺川 紹隆 17～19

昭和61年度総会報告 19



大会議室での開会式

新庁舎で総会

昭和六十二年度の本会総会は、昨年の十月に完成した本山の宗務総合庁舎を会場に、会員二十人、賛助会員十一人が出席して開催された。開会式に続く総会では予算案、事業計画案などを満場一致で承認、その後、記念講演の後、朝枝総務の講演、さらに恒例の会員三氏による体験発表などが行われた。以下、当日の写真グラフと記念講演をはじめとする講演録を一かつしてお届けする。



総会研修室で



国際化時代における

宗教について考える

——宗勢実態基本調査を顧みて——

龍谷大
教授 口 羽 益 生

海外開教に生きた父

今から三年前になりますが、宗派総局から「宗門の実態と問題点について、総合的に調査してほしい」という依頼を受け、若い先生方と一緒に調査をやらせていただきました。この調査は『宗勢実態基本調査』という名のもとに行われました。宗門の実態や問題点を把握するということは、そんなに簡単なことではございません。いろいろ試行錯誤の分析をいたしまして、ようやく昨年の三月、報告書を作成して、総局へ提出し、今年三月に、その調査内容の概要を分かりやすく書きまとめたものをここの『宗報』三月号に掲載させていただきました。



講演者略歴

龍谷大学文学部教授
——文化人類学・宗教社会学専攻——
龍谷大学文学部卒、京都大学大学院修士課程・博士課程修了。米国・コネリク大学大学院修士課程修了。
山陰教区邑智西組満行寺住職

皆さんの中にも、それをご覧いただいた方もおありかと思いますが、本日の会合の事務局の方が、そこへ書きました私の「まとめ」を見まして、その考え方を自由にここで話してほしいと言って来られました。最初、私は勘違いをいたしました、調査結果を、ここで話しかけるのかと思いましたが、そうではなくて、私の考え方を自由にお話しせよと言ったことが分かりましたので、『国際化時代における宗教について考える——宗勢実態基本調査を顧みて——』という題目で、ふだん考えていますことをお話しさせていただく次第でございます。

こういう題目を選ばせていただいたのも、私自身の生い立ちと経験によるところがあります。私は、島根県の石見の山奥の貧乏寺の出身でございますが、父親が早くから海外布教に従事しておりました。香港を出発点にいたしまして、ハワイのマウイ島、それから再

びこちらへ帰って、台湾の台南、そして最後はハワイのホノルルに移りました。そこで第二次世界大戦がはじまり、父はアメリカ大陸で収容されて、戦後になって日本へ帰ってまいりました。

こんなわけで、私と私のきょうだい全員は外国生まれで、姉二人は香港生まれ、私と妹は台南生まれであります。私は五歳の時まで台湾におりまして、五歳から小学校の二年生の時までハワイのホノルルにおりました。ちょうど、第二次大戦がはじまる前年、昭和十五年に母がひどいリウマチになりましたので、治療のため日本に帰って来たわけです。父は、昭和十七年の三月にホノルル別院に納骨堂を建立する仕事を終えたら、ハワイから引き揚げて帰る予定でしたが、昭和十六年十二月八日に日米開戦ということになりました。ちょうどその朝は、アメリカでは日曜日ですので、通常大勢の方々が日曜礼拝のため、早朝から本願寺別院にお参りに来ら

うど留学して一年後に、棚瀬先生から、「三年先の東京オリンピックの年、昭和三十九年に東南アジアの調査をやるから手伝ってほしい」ということで、そういうことが縁になりました。それ以来、長期短期あわせて十数回以上になるとは思います。東南アジアの各国へ調査にまいったわけです。

内と外から宗門を見る

こういう私の生い立ちと経験からいまして、宗門のことを考えます場合に、私にはいつも宗門の内と外から見る癖があります。宗門のことについて何か考える場合に、国際的にみるとどうなるのかとか、世界の諸宗教と比べたら、私たちの宗門はいかにあるべきか、というふうに考えるのが癖のようになっております。それで、宗勢実態基本調査の結果も、国際的な視点から考えたら、どういうふうに見えるのだろうかというふうなことも、つい考えてしまうわけです。

その辺の私の考え方を、本日はご披露させていただきます。国際化時代という言葉が、最近しきりに口にされておりますが、国際化時代に宗門はいかにあるべきかという問題には、二つの問題があると思います。一つは、教団としての宗

門はいかにあるべきか、という問題であります。もう一つは、宗門人としてのわれわれはいかにあるべきか、この時代にいかに対処するべきか、宗門人個人として自分はいかなる心構えを持つべきかという問題があると思います。教団としてのあり方は、かなりいろいろ複雑な問題、たとえば、北米やブラジル教団の自律性や日本の教団との関係というような問題がからみますので、具体的には、簡単な論ぜられる問題ではないと思いますが、基本のところは、宗門人はいかにあるべきかという点と共通していると思います。本日お話ししますのは、宗門人として、私はこの時代に、いかに対処すべきかという私自身の考え方を披露させていただくわけでございます。

まず最初に、国際化時代というのは、どんな時代かということをはっきりさせておきたいと思っております。これについては、具体例でお話しすると、一番よく分かりますし、実感もあるかと思うので、最近の私の体験からお話します。

私は龍谷大学に奉職しておりますが、今年の三月二十五日に卒業式がありました。卒業式の後で、同窓会の歓迎パーティがあり、その後で、私が指導しました数人の学生が、「先生、別れる前に、もう少しビールでも飲みましょう」と言いますので、私は行きつけの所

れます。私の父は、たまたまハワイの別院輪番をしておりまして、日曜日には説教をします。ですから日本軍による真珠湾の第一次攻撃が済んだあと、大勢の日本人を動員できるといふ理由で、私の父親が、民間人で一番先にMPに逮捕されたという話をよく父から聞きました。おそらく開戦当日、真っ先に逮捕された民間人の一人が父ではなかったかと思うのですけれども、子供の時代から、そのような家庭環境にありました。

それから第二次大戦後は、フルブライト留学制度のおかげで、私は昭和三五年にアメリカ東部のコーネル大学へ二年間留学させていただきました。当時、私は東南アジア地域に関心をもっておりました。それは私の恩師の影響によります。私たちの宗門に関係の深い方に宇野田空先生という日本の宗教学の草分けの一人であった立派な先生がおられました。その宇野先生の研究を継がれたただ一人のお弟子さんでいらした棚瀬襄爾先生は、岐阜の本派寺院の方で、私の恩師でございました。宇野先生、棚瀬先生は、東南アジアのマレーシア、インドネシアのほうに非常に深い関心をお持ちになっておられました。この両先生の研究の影響もありまして、私もアメリカ留学当時、機会があれば東南アジアへ行つて、日本と東南アジアを比較してみたいというような気持で勉強しておりました。ちょ

へ数人の学生と行きまして夕刻、ビールを飲みました。そこは、私の知っている唯一の飲み屋でした、よそからお客さんが来ると連れて行く所なのです。ビールを飲んでおりまして、そこで知り合いになりましたある貿易会社の社長さんが来られました。その会社は、婦人服や婦人の下着などを取り扱っている会社ですが、日本の婦人服というのは、デザイナーの良さのために、最近は何高でも世界的にたいへん買われるのだそうです。

草の根外交の時代に

その社長さんと一緒に学生と話をしておりましたら、その社長さんが、学生に向かって「君たち、これからは英語ぐらいはしゃべれるようにならないといかんぞ」というのです。その方は六十歳ぐらいの方でございますが、「私の子供のころには、字の書けない人がいたが、子供たちが、あのおじちゃん字が書けないんだって、と言ってからかったものだった。もう少ししたら、おそらくあのおじちゃん、英語もようしゃべらんのだそうだと子供がからかう時代が来るぞ。だから英語ぐらい、いや一つの外国語ぐらいは、しゃべれるようにならないといへんだぞ」というようなことを言われたのですけれども、もうす

ぐ来るどころか、私の周辺を見回しても、この二、三年の間に、状況がずいぶん変わってきておりまして、その時代はもうきているように思います。

たとえば、龍谷大学というのは京都大学と比べますと、教員の数とか、施設の上からしますと、その規模は十分の一ぐらいの小さな大学です。京都大学のような所ですと、もう十年前から、ずいぶん多くの外国の研究者や留学生が来ております。龍大では、せいぜい仏教学科に留学生が来るのではないだろうか、と、数年前までは、私はそういうふうに考えていたわけです。ところが、この二、三年の間に情勢は非常に変わってまいりました。昨年などは、英国から英国人の専任教授が赴任して来られ、今年の入学試験では、私はその方と一緒に試験場で試験監督をしました。まさか英国人の教授と、こんなことをするのは、二、三年前まで予想もしておりませんでした。また、この二、三年の間に、各国の留学生が増えまして、正確な数はまだ聞いておりませんが、いまは少なくとも四十名ぐらいはいると思います。今までは、仏教を学びに来る学生が毎年二、三人いるというような状態だったので、最近はそのようになって、各分野に留学生がいるという状況であります。

私の属しています社会学科でも、韓国とインドネシアから、二人の大学院の学生が本年

度入学しました。私は毎週、その留学生を教えています。韓国からの学生は、日本語には非常に強いのですが、インドネシアの学生は、文部省の奨学生として来ているのですけれども、日本語が十分ではありませんので、特別指導してやらねばならず、毎週一回特別にその学生を指導しています。そういう異国から来る学生と日常的に接触するということは、数年前までは、ないであろうと考えていたのですけれども、情勢は急速に変わりつつあります。

国際化というのは、そのように、違った文化を身につけている人々、つまり、異なった民族の人々と、日常的に接触することが増えるということ、つまり、そのような接触が日常化してくるということでもあります。国際交流というのは、政府の外務省の仕事とか、大企業の人たちのことだと考えていたのが、そうではなくて、近年私たちの社会は、ごく普通の人が日常的に外国から来た人と接触するような社会に急速になりつつあるということです。

本日おいでの皆さん方は、地方自治体で何らかの役職に就いておられる方であると聞いておりますが、地方自治体でも、途上国からの研修員の受け入れとか、姉妹都市との交流とか、そういう活動が非常に活発になりつつあるのではないかと思います。つまり、草の

根外交の時代に入りつつあるということだろうと思うのです。

東南アジアで調査を

このように、日本では急速に国際化は進んでゆくと思いますが、この時代に、われわれ宗門人は、いかにあるべきかということを考えますにあたって、私はまず、私たちの宗門の今までの海外活動について、私の狭い知識の範囲内で反省してみまして、その特徴というようなものをクローズアップしてみたいと思います。そういう特徴を浮きぼりにするためには、他の宗教と比較するのが一番手っ取り早い方法でございます。そこで私の体験からお話いたします。

私はちょうど、東京オリンピックの開催された昭和三十九年に、マレーシアの片田舎、北西マレーシアのケダー州の農村で、一年近く調査をいたしました。ですから、東京オリンピックのことを、新聞のニュースなどで知る程度のことしか知っていません。そのころはまだ、東南アジアの対日感情があまり良くありませんでしたので、日本の人はマレーシアでは、わずかの商社の方をのぞけば、ほとんどおられないという状況でした。皆さんの中には、戦時中、あちらのほうにおいでにな

った方もいらつしやるかと思いますが、ケダー州には、州都アロールスターという小さな美しい町があります。私はそこからバスで一時間ぐらいかかる田舎で調査をしていたのですが、その町に一人でも日本人が来ますと、すぐに私の耳に伝わって来るほど、日本人がめずらしい時代でございました。その調査では、ずいぶん苦勞をしました。電気も飲み水もろくにない所で調査をし、飲み水には雨水を使います。

そういう所で調査したいへんにしんどかったのですが、その帰りに、ぜひともジャングルの中に住んでいる人達の生活が見たいと思いました。田舎で生活しておりますと、金も使いませんので、それぐらい見てまわる金が浮いて来るわけです。それで、昔、ボルネオと言いましたが、現在はカリマンタンという島があります。その北半分はマレーシア領、元英国の植民地で、サバ・サラワクと言われている所がございます。サラワクのジャングルの中で生活をしている人々に、イバン族と呼ばれる人たちが住んでいるのですが、その生活をぜひとも見たいと思ひまして、無理をしてサラワクにまいったのです。その辺のジャングルも、今では、日本の企業がずいぶん入って、かなり開発されていますが、当時は、まだ戦前と同じような状態でございまして、水路が主な交通路でした。

秘境で伝道する牧師

奥地へ行くには、陸路ではたいへんですので、モーターボートに乗って、川上に行きます。一時間半ぐらい川上にのぼりますと、イバン族の住んでいる所に到達するといふので、中国系の華僑のモーターボートをチャーターいたしました。ずっと川上に行ったのです。かなり大きなクチン川という川ですが、ジャングルの中の川というのは、川岸を樹木がうつそうと覆っております。岸が見えませんが、川は蛇行しております。一時間半ほどしますと、川が蛇行しておりますから、真正面の丘の上に家らしいものが見えてきたのです。イバン族の家は高床で、縁の下が二メートルぐらいあります。虫などがいるものですから非常に床が高いのです。そして長屋で、そこに十何世帯が住んでいます。一世帯が一部屋に住んでいるわけです。ところがその丘の上に見える家は、高床の家とは違ってペンキが塗ってあります。イバン族の家屋にしては、どうも変だと思ひましたが、ボートがだいぶ接近して肉眼で家がはっきり見えるようになった所まできますと、その家の屋根の上に十字架があったのです。私はたいへん感動いたしました。

その近くにイバン族の集落がありました。その集落へ行きましたら、中学生ぐらいの年配の子供たちが出てきて、非常にきれいな英語を話すのです。「どこで英語を習ったの」と問いますと、「牧師さんに習った」というのです。「牧師さんはいまですか」と言ったら、いま遠くの焼畑にみんなと一緒にいるというのです。通常焼畑は家屋から少し離れた所にあります。それで私は、その牧師さんには会えませんでした。

その教会はプロテスタントの教会でしたが、非常に感動したのは、次のような理由によります。私がおりました北西マレーシアの村は田舎で、まだ電気も水道ありませんが、町には近いですが、そんなに不便な所ではありません。ですが、このジャングルの中は私が住んでいた所よりずっと不便な所です。かりに教会を作っても、すぐに一般の人が礼拝に来るわけはありません。ですから、そういう所へ教会を作れば、牧師さんは、何をするかと言いますと、子供たちに英語を教えたり、あるいは周辺の人々の生活を助けたりして、根気強く村人と接触して、土地の言葉も修得しなければなりません。トランジスタラジオも無いような時代でありましたので、何もない所へ一人で入ってきて、しかも苦勞しても、自分が生きている間に、苦勞の成果がみえるか稔らないかわからないような環境

宗門の開教は消極的

そのような状況に出くわしますと、先ほどお話したように、いつもわれわれの宗門は、これでいいのかなと思うわけです。またそのころに、私はもう一つ驚いたことがありました。天理教の信者が台湾や香港の中国系の人々の間に、もうすでにいるということを知り驚きました。

東南アジアには、東南アジア独自の宗教がありまして、マレーシア、インドネシアはイスラム圏で、マレー人は例外なくイスラム教徒であるといわれますほど、民族と宗教が密着しております。タイ国では上座部仏教が盛んで、タイ国を支えているのは、王制と仏教であると言われていますほど仏教が国中に浸透しております。男性は必ず一生に一度は得度しなければいけない国で、得度しないと一人前ではないといわれています。それが一種の成人式になっています。

それぞれの国に、それぞれの宗教がありまして、町に中国系の華僑が大勢います。華僑

の中で伝道するというのは、すさまじい使命感だなど、気が遠くなるようなその根気と粘りとすさまじさに非常に感動したのであります。

混血的になりつつある傾向がみられます。ですから、アメリカの日系社会といいますが、底辺は従来の日系社会から変質しつつあります。

本質求める日系3世

それから、もう一つの特徴として、日本人の場合だけではありませんが、アメリカの移民に共通に見られます現象として言われますことは、一世は自分の祖国のことを考え、二世は父母の国のことを忘れてアメリカ人になりきろうとし、三世は自分の先祖の国の純粋なものを求めると言われています。先祖の国のルーツを探るといっているのであります。仏教に関して言いますと、一世は仏教を導入した、二世は立派なお寺や仏教会を建てた、三世は純粋な思想を求め、仏教の本当の精神を求めるといふふうに一般にいわれています。これは日系社会だけではなくて、他の移民社会でも同じようなことが言われているのであります。

このように、日系社会の中も変わりつつあります。毎年アメリカから三世の方が、龍谷大学に仏教を学びに来られますけれども、その三世の方は非常に熱心であるという感じを受けます。三世の人は、仏教会は建物だけが

は独自の宗教を持っています。中国系の民間信仰や浄土教の信者がいます。しかし、華僑は宗教的にはかなり寛容でありますので、その間隙に天理教などが浸透していつているのです。キリスト教も浸透しています。最近では、創価学会の人も非常に増えまして、シンガポールやジャカルタには、ずいぶん創価学会や天理教の人たちがいると聞いております。そういう他の宗教団体の活動ぶりを見るにつけて、「私たちの宗門は、これでいいのか」と思うのであります。これらの宗教団体に比べますと、私たちの宗門の海外伝道のあり方は、一見、非常に消極的に見えます。どちらかといえば海外に行った日本人社会の間に浸透するという特徴をもっているように見えます。

私の父は、明治時代の末ころ、香港の日本人社会で、はじめてお寺を作るといって開教使として香港へ行ったと聞いておりますが、その寺院も、今では跡形もなくなっています。第二次世界大戦のあったせいもありますけれども、台湾の台南にありました寺も、台湾の人が引き継いでいるとは聞いておりません。日本人社会がなくなると、真宗の伝道のあとは、跡形もなくなり、真宗の海外伝道は一見非常に消極的に見えるわけであります。ですから、激しい考え方としては、これではいけない、もっと外国人の中へ直接入り込まねば

立派であってはいけない、そこに本当の精神がなくてはいけないという考え方なのです。ですから、仏教は日系社会の中へ入って行って、アメリカでわれわれの宗門は定着しているのですが、純粋なものを求める人たちが完全なアメリカ市民である三世の間に出て来ているわけです。また三世だけでなく、日系社会の活動を通じて、真宗に関心をもたれた白人の方も少なからずおられます。

私は、もう一つの例として、お話し申し上げたいのは、沖繩の例でございます。沖繩の宗教のことをよくご存知の方はおわかりだと思っておりますが、沖繩には、なかなか世界宗教は浸透しないようなところがあります。御獄（ウタキ）信仰というのがありまして、皆さんも時々テレビでご覧になれるかと思いますが、女性の神主のような司（ツカサ）と呼ばれる人が中心に儀礼が行われます。沖繩とか八重山のお祭りに参加しますと、やはりその司が中心です。たとえば、お祝いの時に、床の間の前の正面に座るのは司という女性の方なのです。そういうのを見ますと、本土とはずいぶん違うという感じがいたします。この沖繩開教地には、現在七カ寺の本派寺院があります。中には、形だけの寺もありますが、那覇へ行きますと、本派寺院は非常に立派で、本山の別院かと思われるような立派なお寺でございますが、それは、こちらから開教使が

いけないという意見も当然出てくるわけです。しかし、私は、浄土真宗は、それほど消極的なものではないと思うのです。若い時はなんとなく寂しい気がしたのでありますが、だんだん考えてみますと、浄土真宗のみ教えは、み教えの本質的なところから、キリスト教的なすさまじさというものはなく、有縁の方々を通じて浸み込んでいくような、そういう広がり方をするところに特徴があるのではないだろうかと思うのであります。

たとえば、外国のあちこちの日系人社会のことについては、私はよく知りませんが、多少知っておりますアメリカの日系人社会をみましても、たしかに浄土真宗の海外伝道の拠点は日系社会の中にあるのですが、その日系社会そのものが、今日では大きく変質しつつあります。この点について一、二お話ししますと、こちらから移民で行かれた方は一世、その子供は二世といわれます。現在は一世の孫、ひ孫の三世、四世の時代になりつつあります。二世の方は、まだわりあい日本語を理解される人なのですが、三世、四世になりますと、考え方や言葉から、まったくアメリカの市民です。ところが、三世の方々の間には、日本人以外のメキシコ系の人だとか、あるいは白人の人たちと結婚している人は、いまだ大勢であるとは言えませんが、かなり増えつつあります。三世の家族には、かなり

行つて沖縄の人たちに伝道した結果のものというよりは、むしろ沖縄の人がアメリカへ移民して、アメリカの仏教会で門徒になり、帰つて来て、沖縄の本派寺院を支えているというのが実態のようでございます。

このようにみてまいりますと、宗門の海外伝道活動は、日系社会でしか行われていず、非常に消極的なもので、それではいけないという考え方に對して、私は必ずしもそうではないと思うのであります。私たちのみ教えは、如来の大悲を仰ぎますとともに徹底的な内省を伴なうみ教えでございます。親鸞聖人が、「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし」といわれますように、徹底的な内省を中心としたところがござります。ですから、そういう本質的なところから、真宗では、あのサラワクでのキリスト教のようなすさまじい勢いというものが出来来ないのではないかと思います。かつての一向一揆のようなすさまじさは、その社会経済的な条件と関連しているように思います。

こういう私たちの宗門の姿勢は、必ずしもこれからはマイナスにはならないと思います。むしろ、国際化時代には望ましいあり方ではないかと考えております。そのところを特にお話したいのですが、その際、私たちはまず、宗教とは何なのか、われわれに何を与えてくれるものなのかということをはっきり

踏まえておかなければいけないと思います。

私の娘がなぜ死ぬか

この点についての理解のために一つの例をあげてお話をしますと、十数年も前のことであります。日本航空のジェット機がモスクワ空港で着陸寸前に墜落したことがあります。その時、多くの方が亡くなりました。その日の新聞の夕刊だったと思いますが、亡くなられた一人のステューワーズの父親へのインタビュー記事が新聞に掲載されました。私は、それを何げなく読んでおりまして、非常に感動し、印象深く心に残ったことがあります。宗教の本質に触れる問題がそこにみられたからであります。

どういふことかといいますと、その父親がインタビューに答えて、次のように語っておられるのです。「きょうは自分の娘の誕生日であつた。娘はモスクワからきょう帰つて来るはずであつた。娘が帰つて来たら誕生祝いをしやるためにケーキを買つて帰つて、今夕、親子三人で祝おうと思つていたのです。娘は一人娘だったので、かなり反対したのですが、本人がぜひともステューワーズになりたいというので承知したので。日航には

ずいぶんジェット機も多い。ステューワーズもずいぶん多い。それなのに、なぜ私の娘が死ななければならなかったのか」と言つて絶句しておられるのです。

この問いには、その日航機がモスクワへたまたま着陸する時、霧が多かつたとか、自動操縦の機械がたまたま変だつたとか、そういう常識的な説明は何ら解答にはならないのです。「なぜ」私の娘が、そのジェット機にたまたま乗つて死ななければならなかったのか、なぜ私が娘を失うというような目に会わなければならなかったのかという問いへの解答は、いかなる常識的な説明でも、科学的な説明でもないのです。その父親の求めているものは、そういう目にあつて、それが自分にとってどういふ意味を持つてゐるのか、それを理解したいということなのです。そこで求められているのは、そのような目にあう自分の人生の意味なのです。

自分は何のために生きてゐるのか。そういう目にあつて、自分はいかに生きべきなのか。その人生の意味、違つた言葉で言いますと、その意味を供給する世界観なのです。究極的な人生の意味を求めておられるのです。この問いに答えられるのが、より広大にして真なる立場から現実の意味を見直す宗教的な世界観だと思います。結局、宗教は、何を与えてくれるのかといいますと、自分は何のために

この世に生まれて来て、何のために生きていくのかということの究極的な意味と方向です。それを教えてくれるものだと思うのです。この点をわれわれはよく理解していなければいけないと思います。

国際化時代を生きる

国際化時代といいますと、先ほど申しましたように、いろんな民族、いろんな宗教を持つてゐる人たちと日常に出会う時代であります。それぞれの人は、それぞれの生き方を持つてゐるのであります。それを尊重しなければならぬというのが、新しい考え方です。私たちは自分の世界観を人に押しつけてはならないのです。世界観の強制はいへんな紛争のもとになりかねません。だいたい一九世紀後半から、今世紀にかけてのさまざまな紛争の大義名分は、ほとんど世界観の押しつけに関連したところがあります。現在も、イスラエルとアラブの間で、うまくいかない問題もありますが、なかなか決着のつかないのは、どちらの世界観も正しいというところにこだわっている面があります。自民族の世界観を中心に考えますと、争いのもとになります。ですから、われわれは、お互いにお互いの世界観を尊重しなければならないの

が、これからの社会だと思ひます。これが相対主義です。相対主義が、ある程度なっていないといふことでありまふ。これが国際化時代に考えなければならぬ一つの重要なポイントであるように思ひます。

私がアメリカへ留学いたしました時に、京都から三名の学生が留学したのですが、そのうちの一人に栗本一男という人がいます。この方は、日本に帰つて来てから、間もなくユネスコに勤められまして、東南アジア各地を経て、現在はフランスにおられますが、国連機関で二十年間仕事をきた方です。最近、この栗本さんがNHKブックスから『国際化時代と日本人』という書物を書いて出してあります。二十年間も国際機関で活躍して、そこから、日本人はいかにあるべきかを考えて書かれたのがこの書物で、なかなかおもしろい書物です。皆さんもお暇があれば、ぜひお読みになられることをお勧めいたします。

この栗本さんが、自分の考え方の結論として、「これからは、日本人として立派であるよりも、人間として立派でなければならぬ。そういう時代である。日本人として立派であろうとすると角が立つ。これからは国を見るのではなくて、人を見る時代である」というふうな力説して、それを基本の考え方として書いておられますが、私もまったく同感でございます。

私は、東南アジア各国に、何人かの友人を持つております。アメリカにも友人を持つております。ここ二十数年の付き合いであります。この友人たちは、非常に立派な人たちで、私は尊敬しております。日本人の多くの人よりも、はるかに立派だと思つています。

国単位で人を見るのではなくて、個人単位で人を見ていかないと、とんでもない誤解をします。先日、龍谷大学で、一週間ほど洋上大学という形で、学生五百人余りが上海を訪れて帰つて来ました。昨日の京都新聞を見てみますと、その記事が載つていました。学生のいろいろな感想が新聞に書いてありました。が、中には「中国人が嫌いになった」というのもありました。中国にも、日本と同じように、よい人もあれば、嫌いな感じを与える人もいます。それなのに、いく人かの嫌いな人を見て、全体をそうだと思うのはとんでもない間違いです。それは大きな誤解のもとになります。日本人より、はるかに立派で尊敬に値する人も多くいるわけですから。栗本さんが言うように、今は個人単位で相手を見る時代であり、日本人として立派であるよりも、人間として立派にならなければならぬ時代であるという視点が第二の最も重要なことであると思ひます。

以上に申しました二つの点、つまり、相対主義、相手の世界観を尊重しなければいけな

いことと、お互いにうまくやっていくには、人間としての相互の信頼を深めることですが、その場合に非常に重要なのは、人間として立派であるということの二点で、これからの重要な考え方ではないかと思ひます。

住職と門徒にズレが

宗勢実態基本調査の結果の中で、非常に大切な点を二、三申し上げますと、その一つは、住職と門徒代表の間の宗教意識に、非常に大きなギャップがあることです。ある意味で、この事実、われわれの宗門としてはたいへんな問題の一つであると思ひます。どちらかといえば、平均的にみまると、住職のほうが浄土真宗のみ教えからしますと、はるかに望ましい考え方を持っています。たとえば、靖国国家護持の問題にしても、住職のほうは、賛成は十六%、しかし、門徒代表の方では、賛成は七十%です。氏神の祭りにいたしましても、住職のほうで氏神のお祭りはある程度協力しなければいけない、という意味での賛成の方は三五%、門徒代表は六十%で、そういう大きなギャップがあります。

門徒代表の中にも、すばらしい意識をお持ちの方もいます。それを分析いたしますと、だいたい十人の内の半数の五人の方が、かな

り熱心な方で、他の半数の方が私たちのみ教えを十分に理解しておられない状態です。どちらかといえば、民族宗教的な考え方の強い方たちです。熱心で篤信の門徒代表の五人のうちで、特にすばらしい宗教意識を持ち、積極的に信仰の集いとか奉仕活動に参加して、しかもお寺の世話をもよくするという方は二人です。この二人の方の意識を調べますと、本当にすばらしいのです。

私たちが調査しましたのは、門徒代表の方なのですが、それを門徒一般に拡大して考えてもいいと思ひます。二十%の方はすばらしい信仰や意識をもっておられます。ですから、一万人の門信徒がおれば、約二千人がすばらしい考え方、つまり、本当にみ教えを身につけて、十分に活躍しておられる方がおられることが分ったのです。これは大変心強いことだと思ひますが、こういう方がもっと増えることが今もっとも望まれることです。

もう一つ、非常に大切なことは、そういう門徒が属している寺や、また非常にいい宗教意識をお持ちの住職のお寺ほど、伝道教化活動に熱心であるということです。つまり、教化活動の盛んなお寺の住職と、そこに属しておられる門徒代表の方は、すばらしい宗教意識をもつて活動しておられるということです。これには、住職がみ教えを十分に身につけておられるから、伝道教化活動にも熱心になら

れるということによるのでしようが、また逆に熱心に活動されればされるほど、一層信仰の味わい方が深まるという傾向がみられるともいえます。そしてそういう環境におられる門徒代表の方も、すばらしい行動と意識を持っておられるということ、つまり、伝道教化活動が住職と門信徒の望ましい宗教意識の醸成に寄与していることが宗勢実態基本調査で分ったのでございます。

以上の住職と門徒の間の意識ギャップが非常に大きいという問題が、国内的には一つの問題であります。つまり、このギャップを少しでも埋めていかなければいけないということでもあります。しかも同時に、他方で、国際化はどんどん進行しつつあります。この問題にどのように対処すべきかという点がもう一つの問題であります。

時間を要す宗教理解

一見、この二つの問題は異質のものであるように考えられますが、一つの同じ問題であると思ひます。栗本さんの視点を借りて言いますと、私たちはこの両方(国内的、国際的)とも、同じ視点で対処しなければならぬということです。それは、どういうことかと申しますと、宗門人としての私が、人間的に魅

力を持つには、どうすればいいのかということ、もう少し積極的に考えなければならぬのではないかと思ひます。もとより、ここで言います人間的魅力とは、内に虚仮をいだいて、外に賢善精神のすがたを示すという意味での魅力ではなく、人々に浄土真宗の世界観に関心をもつてもらうための魅力であります。

以上の二つの問題は一つであると申しますのは、国内的にも急速に都市化が進行しつつありますが、これは人々の考え方や価値観が多様化していくことであります。つまり、国内的にも価値観や考え方が多様化し、国際化と似た状況が生じつつあるということでもあります。したがって、宗教という観点から考えますと、都市化と国際化は同じレベルで考えてもよいと思ひます。その際、私たちがもう少し真剣に積極的に考えなければならぬことは、多くの人が、私たち宗門人の行動を見て、私たちの考え方に関心をもつような魅力を、私たちは行為の上で示す必要があるように思ひます。

しかし、人間の魅力や人間の立派さの背後にある考え方というものは、そんなに簡単にわかるものではありません。ある人がすばらしい人であるということは、その方が亡くなって、その人の一生を振り返ってみて、や

派さを理解するには、ずいぶん長い時間がかかります。その人の一生を見てみないと分からないようなところがあります。人のもつ宗教的世界の理解には、そんなところがあります。宗教の世界というのは、いま植えた種子が、いつ芽を出すかわからないような世界だと思ひます。機縁が熟するの非常に時間のかかる世界であります。

私に何ができるのか

その中で、非常に大切なことは、日々お念仏によって、与えられた心の鏡をもって、われわれは内省を深めると同時に、もっと積極的に、念仏者としてわれわれに何が出来るかということを考える必要があるのではないのでしょうか。「恩徳讃」にもありますように、親鸞聖人という方は、非常に内省の深い方でいらつしやいます。同時に、はげしく「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし」と、報謝行の大切なことを強調しておられます。私たちは、このところの理解をもう少し深めて、積極的に自分自身を深めながら、自分には何が出来るかを考えて、前向きに活動しなければならぬと思ひます。

結局のところ国際化時代に最も望まれることは、私自身に何が出来るかという問題に帰



宗門の願い

真宗者にとって「靖国」とは

総務 朝枝実彬

浸触されていた「私」

テーマに「宗門の願い」と掲げさせて頂きました。門信徒会運動、同朋運動を進めていくことが宗門の願いであると申し上げたいのであります。

この運動につきましては、六十一年度の計画書が出ておりますが随分整えられております。しかし一番根本に立ち帰っていきますと、ご開山聖人の前に出て我われはどうであろうかとふりかえったとき「まことにあいすまなにかぎりでございます」というところの「目覚め」から出発していると思うのです。

しかし、なかなか運動の精神も徹底してないのが現状だともいえるわけです。それでも、これをやらねばならないという方針で進めております。ですからこのたびの宗務の機構改革はこの運動を中心にした改革になっているのであります。運動本部長は総長であり、総長がさしつかえある場合は総長が指名する



総務があたります。そして、伝道部、社会部、組織教化部などから財務関係、さらに法式部、参拝部などすべてが運動の精神を体して取り組んでいくこととなります。この門信徒会運動と同朋運動の二つを教団の基幹たる運動としておりますが、基幹運動という運動があるわけではありません。

これ以上、具体的に詳しいことは申しませんが、この運動を力強く推進することが現在のわが宗門の方針であり願いであるといつてよいでしょう。この運動の本質的な部分ではつきりと認識しておきたいことがあります。運動というものはすべて目覚めから出てくるのであります。教団はながい歴史を経ますとマンネリ化を招き、活力を失ってきます。そうした教団がそれでもなお教団たりうる一つのはずみは何かという自覚ということだと思ふのです。自覚が起きるといふことが、教団が再び教団に立ちかえっていく一つのポイ

ントなのです。

現在、教団はいろいろな問題に直面しております。そうした状況の中にあつて、教団の根本にかかわる問題に直面し、抱えているのであります。その一点を明確にしていくことが自覚の自覚たる由縁であります。五十九年度までは門信徒会運動が「同朋教団の自覚と実践」というスローガンを掲げておりました。私たちの教団が同朋教団であるという自覚なのか、私はそうは考えなかった。同朋教団の自覚とは、八まったく同朋教団ではありません。自覚というものの自覚、聖人にそむき、恥入る現実の自覚でありましょう。そこから初めて同朋教団に立ちかえっていくとする「願い」が生れます。このような意味から、一番根本にかかわる問題として私たちが直面しているのが靖国問題だと思ふのです。靖国問題は外から私たち教団に押し寄せてくる大きな波です。と同時に、私たちがこの問題に取り組んだとき、自らの中に見出したものは何か。それは私の内側が「靖国」に浸触されていたということ。だから外からおいかぶさる問題であるとともに内側にかかこんでいる問題であるといふところに「靖国」の根の深さがあります。

神道の思想と信仰

す。靖国神社国家護持・公式参拝に反対せざるをえないのです。これは一宗一派のことではありません。また、靖国神社をとりまき、戦前への逆行の動きが感じられることは重大な問題ですが、きようはそれにはふれる時間があります。まず、「信教の自由」——これは大切なことなのですが、一般にさして問題にされていないようです。「どうでもいいや」といった認識が、恐ろしい情況をもたらすことにつながるというのを忘れてはなりません。

黙ってきたことが：

さて、ことしの五月、龍谷大学で「信教の自由」講演会が靖国公式参拝に反対する団体の主催で開催されました。これには津の地鎮祭訴訟で「違憲である」と判断された元最高裁判所長官の藤林益三先生が招かれご講演され、私も会の冒頭であいさつをさせて頂きました。その講演会の開催案内はひろくなされましたが、講演会の前日でしたか、こんなことがありました。大阪のある人から電話があつて、「靖国反対もいいけど、あまりぎょうさんに言わなくて小さい声で言っておいたらええやないか」ということでした。私は「拡声器があるから、小さい声では言えん」と言つて笑つたことでした。このような声が一般的であることも否定できません。

龍大での講演会の後、私はすぐに福井へ飛び、北陸地区の青年僧りよ有志の方々が開催された「靖国を考える念仏者の集い」に出席させて頂きました。公開講演のあと参加者との懇談会があつたのですが、その席上、「うちの息子は我われのために死んだが、あんたはいつたいていどう思う」とつめ寄つたおじいさんもおられました。なかにはすばらしい認識を持ったご門徒の方がかなりおられ、うれしかった。靖国問題の本質を明確にとらえている方がたくさんおられたのです。北陸は封建的な面が少なからず残っているように聞いておりましただけに、認識をあらたにした次第です。

ともあれ国家が神道と結びつくことになる、私たちはいやおうなしに神の前に頭を下げなくてはなりません。このにがい体験を私たちは明治維新以来八十年間強めさせられたわけです。宗門も時の政府の見解に妥協せざるをえませんでした。ご法義も思いもよらない姿に変えられ、それが今日もお尾を引いて「この世は神さん、死んだら仏さん」という有様です。

戦時下では、天皇のために死ぬことが最高の行いとされていきました。そこにお念仏は用事がありません。敗戦で民主主義の憲法が制定され「信教の自由」が保障されたわけですが、長年飼ひ慣らされたカゴの鳥はもう羽根

靖国問題を単に九段坂にある宗教法人の一神社の問題だとして片づけてはなりません。問題の本質は、靖国神社の国家護持を推進することです。その流れているものは何かということ。その底に流れているものは何かということ。靖国神社の思想であり信仰であります。問題の核心はここにあります。数年前、靖国神社の国家護持推進の急先鋒である衆議院議員の奥野誠亮氏が朝日新聞に投稿をしていました。この投書の中で「靖国神社の国家護持、公式参拝が実現したら国家神道が復活する」といったいかにも時代がかったことを言う人がある」と述べています。

しかし、こうした奥野議員の発言は、彼自身が国家神道的な思想の持ち主であることを表明したようなものです。私たちから見れば、靖国神社の国家護持、公式参拝が実現した場合、国家神道の復活につながるだけでなく、それを実現しようとする動きそのものの中に国家神道の思想・信仰が動いています。「神社だけは特別」とか「日本は神国である」、「神社は宗教ではない」といった考えは、国家神道から出てくる考えです。

靖国神社の国家護持が実現した場合、まず憲法で保障されている「信教の自由」が侵されることとなります。人間が人間として生きていく世界が破壊されることであります。いのちの尊さがむざむざにも無視されてしまいま

が立たなくなり扉を開けられても飛び立てません。問題なのは真宗門徒といいながら自分の内側が靖国[〃]になっていることです。

最近、私はご門主さまの組巡教に随行する機会がありました、そのおりまざまざと宗門の人たちに根づいた[〃]内なる靖国[〃]を痛感いたしました。蓮如上人がご苦労されたゆかりの土地であるのに、ご門徒の方々の発言の多くがおよそ浄土真宗とはかけはなれたものなのです。教団の内側を見つめたとき、ご開山聖人の仰せをひたすら聞いていかなければならないことを知らされます。だから靖国問題に我われが取り組むということは、根本的に言うなら真宗が真宗に立ちかえらうとする願いにもとづくものであります。靖国問題を自覚したとき、門信徒会運動は底なる本質の問題をとらえたということが出来ます。

昨年から基幹運動本部の中央講師研修会においても靖国問題が講義されるようになりました。今年には真宗遺族会の代表をされている福岡の大分勇哲氏が真宗遺族会についてVのテーマで一時間余り講演されたのですが、講演のあと大分さんが「我われの運動が宗門において市民権を得ました」と喜んでおられたのが印象的でした。

宗派としては、昭和四十三年宗会が靖国神社の国家護持反対の決議を行っております。それに先立って、宗務所に奉職する独身の宗

務所員で作っていた親睦団体・萌友会が靖国反対の決議を行い、自民党など関係機関に抗議文をいちはやく送ったことは特筆されてよいでしょう。ところが、それ以来の靖国反対運動ははたしてどうであらうか。たしかに宗派が加盟している全日本仏教会や真宗教団連合は靖国神社国家護持や首相等の公式参拝に反対して要請文を首相宛に提出してきましたが、具体的な形でのとりくみはきわめて低調なまま今日に至っています。「長い間、あまりにも黙って過ごしてきた」ということが実感されます。宗門における反対運動に対しては誤解が誤解を生んできたように思います。

特高にマークされ

教団は伝道を生命としているといえますが、靖国問題を避けては今日の伝道はありえないと思います。たとえこちらが避けても、向こうは避けずまわってきます。ここをはっきりと認識しておきたいものです。いつかの宗会で総長は靖国問題に関する質問に答えて「靖国神社国家護持・公式参拝には真宗教団連合の一員として反対しております」と答弁されました。たしかにその通りです。しかし教団連合は具体的なとりくみはいたしておりません。具体的には宗派がやらなければならぬ。宗派としてやることは、みんなに理解しても

らうこと、それをあらゆる機会に浸透していかなければならないと私は考えます。

現在、靖国神社の国家護持法案は引っこめられたままだから「安心だ」という気持が強いようですが、決して安心などできないのです。国家護持推進の運動は着実にすすめられています。国家護持法案が引っこめられてから推進運動が変わりました。靖国神社国家護持への第一段階として「公式参拝」の実現を期しております。しかし、私の考えておりますことは、政治的決着はどのような結果になるかもしれませんが、我われの運動はそれで止むものではない。なぜかと申しますと内部の問題であり、信心の問題であるからです。ですから「私一代」とか、子ども、孫の時代までかかってでも取り組み続けなくてはならないものだと思えるわけです。「靖国」は真宗教団に、わたくしたちに自覚を迫ってやまないので。△それでもあなたは親鸞聖人のお流れをくむ念仏者なのか△と我われに信心を問うています。そして教団の内側をあらわにしたのが「靖国」であります。先の大分勇哲氏が「靖国は善知識です」と言っております。この「靖国」にとりくむことによって真宗本来のすがたに立ち帰っていかうじやないかという願いに立っているからです。

この会の事務局を担当している島根県の菅原龍憲氏は二歳のときお父さんを、富山県の

にごとかVというニュアンスが含まれているように思います。

信心の問題として

このほか『月報』には、島根県下の門徒の神棚の有無について調査した記事がのっています。ある町の住宅には百パーセント神棚がまつてない、どこそこは七十パーセント神棚がないなどと書かれています。そして「神棚がないのは、真宗の僧りよが八阿弥陀仏を信心していたらそれでよい。神棚を置く必要はない」と指導し、それを門徒が盲信しているからである」と結んでいました。政府は、神棚をまつらない真宗門徒を「非国民」と決めつけ、神棚をまつるよう強制してきました。神棚のなかった真宗門徒の家庭に国が力づくで神棚をまつらせたのです。

このように宗教と国家権力が結びつくと、実におそろしいことになります。それだけに「宗教の自由」ということがいかなる意味をもっているのか、考えなくてはなりません。最近、滋賀県においても、神前にお供えするお米を植える[〃]神穀田[〃]の儀式に町がかかわっていることに對して、住民が憲法違反との訴えをしました。これに對して町側は「神穀田の行事は習俗であるから憲法違反にあたらない」と反論しています。政教分離は憲法で

富樫氏も幼いときにお父さんを、そして大分氏が叔父さんをそれぞれ戦争で亡くしておられます。三人の方が主な発起人となって真宗遺族会は結成されました。真宗者が[〃]神[〃]としてまつられていることに疑問と問題を見出したことから真宗遺族会は生れました。神とまつられていることのまちがいを徹底的に追及してゆき、真宗の信心に基づいた追悼法要を勤めるように進めてゆくことなど具体的に運動をすすめています。

次にかつての国家神道にかかわることですが、こんなことがありました。昭和六年の満州事変のぼつ発頃から敗戦までの間、当時の特高警察の『特高月報』の中に、昭和十二、三年頃のことであつたかと思いますが、前門さまが山陰教区の温泉津にご巡教になったことが掲載されています。ご巡教には私も青年僧りよの一人として参加させて頂きました。ご承知のように特高警察は社会運動や天皇制に反対する思想家を弾圧しましたが、ご巡教のあつた頃から宗教団体にも目をひからせるようになっていました。本願寺派も目をつけられていたのです。『月報』の中に八谷光昭管長が温泉津へ巡教したおり、門徒の者たちが門主の顔を拝して[〃]もう言うことはない[〃]とありがたい[〃]などと言って盲信している[〃]といったことが書かれています。この記事の裏には八本当に敬うべきは天皇であるのにな

明確にうたわれているのですが、私たちの周囲には政教分離の原則に違反することが日常茶飯事のごとく行われています。あつてはならないことが平気で行われている現実に、私たち念仏者は信心にかかわる問題としてこれをとらえていかななくてはならないと思います。さらに、「宗教の自由」ということは、憲法に政治にと、ただ他に向かつて求めるだけのものではなく、自らの信心が確立されるところに初めて成り立つものではないでしょうか。それなくしての宗教の自由はありません。念仏禁制の弾圧が三百年間にわたって続けられた薩摩藩の念仏者は、身をもって宗教の自由の意味とその重さを我われに教えてくれています。いのちをかけてお念仏を相続した先達の生きざまに、宗教の自由の精神が生きていると痛切に知らされます。

私たちは今[〃]靖国[〃]という外に内に避けて通ることのできない問題に直面しています。私たちが真宗者でありたいとの願いを持ち続けるかぎり、この問題にかかわっていかなくてはなりません。きょうはこのことを、僧りよの立場から地方自治に参画されているみなさまにぜひお伝えしたかったわけであり、この「靖国」の自覚から教団が今、姿勢を立て直さないなら、そのときはついに来ないでしょう。

体験発表

寺院と

地方行政

大分県久住町前町議

志賀 諦了

(大分教区岡組明尊寺住職)

□ ■
.....

役職に就いて
積極的に発言を

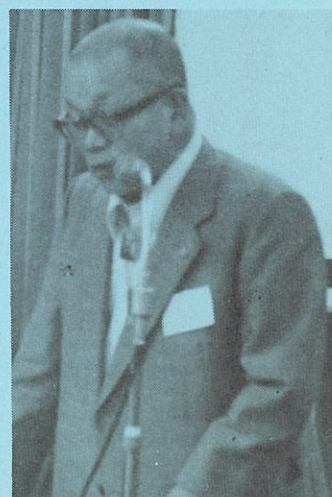
私は昭和四十二年の町議選に立候補して以来、四期連続で町議をつとめ五十八年九月の五期目の選挙でわずかに六票差で落選いたしました。

このような立場ですから、この席に立って体験発表するにはふさわしくありません。内容もありませんが、その点お許し下さい。

私の町は九州のほぼまん中にある阿蘇火山帯の北側、九州の屋根といわれる久住山の南側に位置したところにあります。大分市から四十キロの地点で面積は約四百四十二平方キロメートル、人口は五千五百人余り。産業は、稲作、林業、しいたけ栽培、畜産などで、とくに畜産がさかんです。大分県の畜産試験場もわが町にあり、黒牛の研究では大きな成果をあげ、品種日本一の榮譽に輝いたこともたびたびあります。

私の属しております大分教区岡組についてご紹介します。組は一市四郡にまたがる広い地域ですが、寺院数は二十五カ寺しかありません。組内会を開きましても、最も遠くから来る方は車で約四時間かかります。組の範囲が広いため副組長が三人おります。また、二十五カ寺のうち二十四カ寺が兼業のため教化活動は十分に行われていないのが実情であります。私の町には本派が四カ寺、大派が三カ寺、そのほか天台、法華、禪の各寺院が十一カ寺ありますが、大半の寺の住職も何らかの副業を持っています。町長も兼職寺院の僧りです。このほか町内の本派寺院の住職も一人ひとりが農協の理事など地方行政につながる役職を持っています。

ところで、私の町でも戦没者の慰霊祭を町の主催で行っており、町長が祭の施主をつとめています。このような現実に対して、私た



ち僧りよは行政に対して何らかの発言をしていかなくてはならないと思います。さらに、わが本派の僧りよも積極的に行政上のさまざまな役職に就くべきでしょう。

龍谷顕真会も発足以来十有余年を経ました。将来は本会が宗門をリードしていくような存在になるべく努力していくべきだと思います。来年はいよいよわが町の町議選挙です。そろそろ検討に入らねばと思っているところです。

その際にはみなさま方のご支援をよろしくお願いする次第です。

私の議員生活

島根県金城町々議

竺川 紹隆

(山陰教区
福屋組浄光寺住職)

□ ■
.....

住民と行政の

あつれきの中で

私が所属している自治体は、島根県の金城(かなぎ)町です。人口は六千人足らずで、いちおう町にはなっていますが、小さな村と



いったところと承知のように経済の高度成長以来、全国の多くの町村が人口の流出による過疎化に悩んでいます。私の町は昨年の国勢調査で四年前に比べ四百人余り人口が増えました。全国有数の過疎県である島根県の町村の中できわめて珍しいケースでしょう。人口が増えた主な原因は、雇用の場の確保と隣接する浜田市のベッドタウンとして住宅政策を積極的にすすめたためです。

さて、私は昨年初めて出馬して当選しました。一年生議員です。議員定数が十八からいっきよに十四に削減されて初めての選挙でした。この選挙戦は実にきびしいものでした。こうした中で当選させて頂いたわけですが、これも多分に亡き父のおかげでありました。父は旧村時代に現在の私の年齢で村長をしていました。また町制になった後もながく議長をつとめ、県の町村議会の会長もながくつとめました。だから私は、いわゆる二世議員ですが「ニセ」にならないように心がけております。

今回の体験発表のテーマを、「私の議員生活」とさせて頂きましたが、格別に意識して議員生活をしているわけではありません。先ほど申しましたように、物ごころがついた時にはすでに父が政治にかかわっていました。しかし、敢て申し上げるなら政治姿勢として、何を行うにしても自分が僧りであり

寺院をおあずかりしている身であることをたえず念頭においているということです。

ご承知のように、現在、わが国全体にいえることですが、国民の行政に依存する意識が強くなっています。こうした状況の中で僧りよである私が政治にかかわっていることの意味を自問自答させられる次第です。高度成長という大きな波の中で「バラマキ行政」が行われた結果、住民の欲望が肥大化されました。ところが低成長期に入ると自治体は減量経営を迫られ行政の合理化、簡素化といったいわゆる行政改革に着手せざるをえなくなりました。このため住民と行政のあつれきの中で私たち議員は調整役を余儀なくされるようになりました。議員としてそうしたことにかかわるとき、意識するしないにかかわらず基本的な立場は自分が僧りよであるということです。

例えばこんなことがありました。今年の三月の定例議会では新年度の予算を審議しましたが、その中で役場の職員の通勤手当が条例にも違反するような形で支払うような予算組みになっていたのを発見したのです。いわゆるヤミ給与です。そこで私は同僚議員にもお願いをして、「議会で修正することも辞さない」という強硬な態度を表明しました。最終的には当局の「印刷ミス」ということで話がつき、条例にもとづいた予算となりました。職員側からしますと、「既得権を侵害され

た」ということで新年度に入ってから修正された金額分の通勤手当での受け取りを拒否するといった騒動が起こりつつあります。そうしたこともあって、職員の間で私の評判はあまりよろしくありません。しかし、私はあくまでも自分の基本的な立場に立って、コンセンサス（総意）を得ていくことを願いとして政治にかかわっていくつもりです。それができなくなったと自ら判断したとき、私は議員生活にささくよくピリオドを打つつもりです。

「極道息子」をどう退治するか

つぎに、みなさんの自治体でも「町づくり」「村おこし」あるいは活性化の運動に取り組んでおられることと思います。こうした運動を住民の所得拡大のためと受けとられる方が多いようです。確かにそのような面もありますが、所得拡大をはかり「もっとよい生活をめざそうとする運動」というとらえ方には問題があるように思います。単にプラスアルファという考え方ではなく、むしろその逆を身につけてもらうよう住民の方に色々な機会をとらえて話をするようにしています。

私たちはより高いレベルの生活を求めて日夜働いております。だが、その中味を見つめなおしてみると、人間として大切なものを見失っ

たり、大変なムダや不必要なことがあります。ないかと問いなおしてほしいのです。たとえば申しますと、学校を出たばかりの若い人たちが、大変高級な車を乗りまわしているといったことは、今日少しも珍しくありません。しかし、プラスアルファをめざす生活観よりも、自分の生活の中味を色々な角度から見つめ直すことの方がもっと大事なのです。そのことにより人間として生まれた意味を見出し、生活の中にあるムダや不必要部分を取りのぞくことができます。それが事実上のプラスアルファという形になるわけです。さらに、生活の中味を見つめ問い直すことは、私たち一人ひとりの心の中に住んでいる「極道息子」の退治につながるものと確信しています。

今日、農業経営は危機的状況にありますが、島根県においても農家の多くが借財をかかえています。借財の内わけをみますと、農機具購入など農業投資によるものは全体の六十%で、あとの四十%は生活面での借財なのです。このような実態があるかぎり「地域の活性化」といったかけ声は、お金になることだけに向かってすすんでしましましょう。心の中にひそむ「極道息子」を退治しないままの地域の活性化運動は意味がないように思います。「地方の時代」なる言葉を単なるかけ声に終わらせないためにも、我われは主体性のある

考え方をもとにわが内なる「極道息子」を見すえて政治にかかわっていかなくてはならないように思います。

宗教行事への 公金支出を看視

もう一つ問題提起なのですが、先ほど申しましたように現在「町づくり」「村おこし」運動がさかんですが、こうした運動の一環として私の町でも郷土芸能が見なおされるようになりました。わが町の郷土芸能は、神楽を中心としたもので、明らかに宗教的行事、儀式なのです。このようなことが地域の活性化と観光開発の名のもとに何の抵抗もなく行政ベースに乗せられています。私は三月議会でこの問題を取りあげ「神楽と行政はなじまないもの」と当局に釘をさしておいた次第です。このほか護国神社の問題もあります。私どもの近隣には浜田市に護国神社がありますが、神社は毎年負担金を市町村に割り当てをしています。その負担金が堂々と、「合法的に」ということでしょいか、社会福祉協議会をトネルさせて支払われております。私は社会福祉協議会の理事をしておりますので「そうしたことをいつまでも続けるべきではない」とやかましく申しました。今年度は協議会の

役員が神社に対し「今後、負担金の支払いには一切応じられない」と言ったようです。

各地においてこのような問題はたくさんあることと存じますが、私は僧りよであるということを基本に、そこから一步もはずれることなく政治にかかわっていくべきであるとたえず肝に命じています。この立場に立って支持を得られないのならば、もって瞑すべしといった心境です。だから気分的にも楽です。若輩者がたいへん抗弁なことを申し上げ恐縮しております。どうぞお互いに健康に氣をつけてそれぞれの場において真剣に取り組んでいきたいものであります。

昭和61年度 「龍谷顕真会」総会報告

一、日 時 五月三十日（木）

午前十時～午後三時

二、出席者 三十一人（会員二十人・賛助会員十一人）

三、総会日程

① 開会式

② 総会及び協議会

イ、議長選出 宮崎・推葉村々議

尾前新了

ロ、代表世話人挨拶 三輪善海

ハ、新入会員紹介 和歌山市々議

二、昭和六十年事業報告 和田秀教

ホ、昭和六十年決算報告 事務局《承認》

ヘ、会計監査報告 監査員

ト、昭和六十一年度事業計画案《承認》

チ、昭和六十一年度予算案 《承認》

リ、会計監査員の改選について

◎ 山田真澄・黒木隆之の両氏を再選

又、年度会費について

◎ 会費・賛助会費を六十一年度から

五千元とすることを満場一致で可

決。

ル、記念講演 龍谷大教授

ヲ、体験発表 島根・金城町々議

口羽益生

大分・久住町前町議

志賀諦了

ワ、総局員講演 総務

朝枝実彬

カ、閉会式

以上

事務局から

会費・賛助会費納入のご依頼

昭和六十一年度分、さらに五十六年度以降の会費・賛助会費未納の方は、事務局宛ご送付下さいませようお願いいたします。なお、不明な点確認などあります方は、事務局へお問い合わせ下さい。

会員加入促進のご依頼

地方自治体の首長、議員をつとめておられる僧侶で、本会にまだ加入していない方をご存知でしたら、ぜひ加入をお勧め頂くとともに事務局までご一報下さいませようお願いいたします。

〒600 京都市下京区堀川通

本願寺派広報部内

龍谷顕真会事務局

TEL(七五)三七・五八二

龍谷顕真会会報（第6号）

昭和六十一年八月三十日

編集・発行

龍谷顕真会

代表世話人 三輪善海

〒600 京都市下京区堀川通花屋町下ル

本願寺派広報部内

TEL 〇七五・三七一・五一八一